

パソコンショップ本堂にとって、月末の金曜日は特別な日だ。

店長である本堂十兵衛——ボクの父さんは、ホクホク顔で新作ゲームを店頭の平台に積み上げていく。

「今月も大漁だね。どれも面白そうだ」

ゲームのパッケージに描かれている絵は、アニメ顔の美少女達。そのどれもが、桃色の肌を晒していた。ボク——本堂鷹音の家は、いわゆる『エロゲー屋さん』なのだ。

「できた。題してエロゲースカイタワー！ 花火大会も近いから、浴衣でエッチできる作品も集めてみたよ」
父さんは墨田区に現在建設中の『スカイタワー』に

見立ててエロゲーのパッケージを積み上げて、鼻息を荒くする。そんな父さんの得意気な顔を見て、ボクは軽いため息をついた。

「はあ……生きる糧とはいええ、毎月このエロゲタワーを見るのは辛い」

「なに顔を赤くしてるんだい？ 鷹音もいい歳なんだから、これくらい慣れなさい」

「慣れたくないよ！ 父さんと違って、ボクはそういうのよくわからないし。恋とかしてる暇があったら、犯罪者の一人でも捕まえに行くよ」

「やれやれ、鷹音は根っからのヒーロー……いや、ヒーローだなあ」

「ヒーローで合ってるよ。女の子でもヒーローって扱いだから」

ボクは、携帯電話のストラップとしてぶら下げている青色の宝石——『変身コア』を父さんに見せた。

コアは、ボクがTHP『トーキョー・ヒーロー・プロジェクト』のヒーローとして認められた証。コマンドワードを叫ぶことで、瞬時にシバトルアーマーが展開。本堂鷹音ではなく、チヨダ・ヒーロー『乙女メイデン』に文字通り変身できる。

ヒーローになるのは、子供の頃からの夢だった。ボクが持つ不思議な力を、世の中の役に立てたいと前から思っていたし、ついにその機会がきたのだとやる気に満ちていた。だけど、今のボクは自分自身に胸を張れずにいた。もしかしたらボクは、ヒーロー失格かもしれないから。

「鷹音が都知事さんに見初められて、かれこれ3ヶ月か。早いもんだなあ」

「見初められたとか言わない。都知事さんは純粋に、ボクの力を人助けに役立つと言ってくれて……」

「はいはい。その話は何度も聞いたよ。鷹音がヒーロ

ーを辞めるつもりがないってことも」

父さんは気の弱そうな苦笑を浮かべ、最後に表情を引き締めてボクを見つめた。

「鷹音の気持ちは尊重するよ。だけど、危険なことには首を突っ込まないでくれ。ボク達はようやく安住の地を見つけたんだから」

「安住の地か。でも、それってただ逃げてるだけなんじゃないかな」

「鷹音……」

ボクの言葉に、父さんは目を逸らしてしまふ。

父さんは優しく、ちよつと臆病な人だ。そんな父さんに拾われたからこそ、ボク達はこれまで平和に暮らしていった。許しがたい、あの『実験』から目を逸らしながら。だけど、ボクは――

「どうしたんだい鷹音。さつきから暗い顔をして。何か悩みでもあるのかい？」

「何でもないよ。今日もボクは元気いっぱいさ」

父さんに心配そうな目で見つめられ、ボクは渴いた笑みを浮かべながら目を逸らした。

渋々だとしてもボクを応援してくれるんだ。父さんに余計な心配はかけたたくない。ボクの問題は、ボク自身が何とかしないと……。

「お姉ちゃん、まだ出かけてないの？」

その時、学生服に身を包んだボクの妹——絢乃がお店に顔を出した。という事は——

「やばっ！ 早く行かないと遅刻しちゃう！」

大変だ。先輩にまた怒られる！ ただでさえ最近は何マばかりで、評価が下がってるのに！

「あ、あの。お姉ちゃん……」

急いでお店から出ようとしたら、絢乃がそつとジャ

ケットの袖を掴んできた。相変わらず引つ込み思案な子だ。だけど、急いでるとわかつてるのに引き止めたりと、結構わがままなところもある。そんなところが可愛い。ボクの妹は世界一可愛い。

「お姉ちゃん、絢乃の可愛さで今日も頑張れそうだよ！」

「うん？ ありがとう？」

しまった、きよんとんとしてる。話を戻そう。

「それで何の用だい？ ヒーロスナックなら昨日あげただろ？」

「そうじゃなくて。その……明日の花火大会。一緒に行くって約束、覚えてる？」

「覚えてるよ。でも、ごめんね。その……」

「もしかして、お仕事？」

「うん、任務が入ってね。本当にごめん！」

「ううん、大丈夫。お姉ちゃん、ヒーローなんだから。」

街のみんなのために頑張ってる」

「ありがとう。絢乃は本当にいい子だなあ。頭をぐりぐりしてあげよう」

「あ、もう……頭撫でないで、くすぐりたいよう」

感激のあまり綺麗な黒髪を撫で回すと、絢乃はくすぐったそうに目を細めた。人前では滅多に笑わない子だけど、ボク達の前では素直な顔を見せてくれる。時間はかかってもいいけど、いつか家族以外の誰かの前でも素直になつてほしい。今のところの候補は、今年の春にクラスメイトになった佐緒理ちゃんかな？

佐緒理ちゃんはT H Pの創設者である統京都知事のお孫さんだ。話をしてみたら気さくで気立てのいい子だった。きつと絢乃のいいお友達になつてくれるだろう。

「行ってくるね。埋め合わせは必ずするから」

「うん、行つてらっしゃい」

「佐緒理ちゃんとも仲良くね。父さんは仕事中にエッチなゲームしないこと。それから……」

「鷹音、そろそろ出ないと間に合わないよ」

「あ！ そうだった！ それじゃあ、バイビー！」

「ばいびー？」

ボクは父さんの笑顔と、小鳥のように首を傾げる絢乃に見送られつつ、お店を出た。ドアの先に広がっていたのは、秋覇原特有の雑多なビル群。空は青く、太陽はキラキラと輝いていた。

季節は夏。7月最後の週末。

ボクはこの日、バイビーが死語だと知った――

メイデンのコスチュームに変身を済ませ、墨田川の河川敷にある『墨田公園』に到着。結局10分の遅刻だ。

墨田公園は川沿い造られた歩道がメインとなっており、春は綺麗な桜並木を、夏には花火大会を間近に楽しめる。最近では、川越しに統京スカイタワーを眺められる、新観光スポットとして注目を集めているらしい。とはいえ、スカイタワーはまだ建造中だ。完成予定は来年の8月。何でも展望テッキの内装に力を入れていられるらしく、必要以上に時間がかかっているとか。

墨田川とスカイタワー周辺は、スミダ・ヒーロー『韋駄天 イダテン』さんの管轄だ。ヒーローはそれぞれ担当する区が決まっっていて、縄張りを侵さないのが暗黙のルールとなっている。

けれど今回、ボク達ヒーローは総出で、明日開催される『墨田川花火大会』の警備を行うことになっていた。前日である今日は、班ごとに分かれて会場周辺のパトロールをすることになっているんだけど……。

「おっそーい！」

集合地点である広場に向かうと、いきなり怒号が飛んできた。だけど、怒鳴り声をあげたのが小学生みたいに背の低い女の子だといまいち迫力に欠ける。ぶくと膨らんだ頬なんて、まるで林檎のようだ。

「まったく！ メイデンには社会人としての自覚がないのかしらね！」

ボクの前で腕を組んでぷりぷりしているのは、タイトウ・ヒーロー『風雷 タイラント』。雷門のような帽子を被り、下はスパッツ。小さな肩に羽織った法被が、

花火大会会場の雰囲気とマッチしている。彼女は風と雷を操る高レベルの能力者で、T H Pが発足してまもなくスカウトされた古参のヒーローだ。そして、ボクのような新人にヒーローの心得を教えてくれる先輩でもある。

「遅れてごめん」

「ごめんじゃないわ。申し訳ありませんでしょ！」

ボク達ヒーローは表向き、都の広報課に所属している非常勤公務員という扱いになっている。社会人だから、遅刻したら怒られるのは当たり前。弁解の余地はない。ないんだけど……。

「そこに座りなさい。タイトウ・ヒーロー『タイちゃん』が、ヒーローの心得を教えてあげりゅわ！」

自分を『タイちゃん』とか呼んでる上に嘔み嘔みな先輩に怒られても、緊張感に欠ける。本当に可愛いな、このロリっ娘ヒーローは。

「何を間拔けな顔してるの!?! もう任務は始まるのよ! 人生これすべて戦いよ!?!」

「申し訳ありません。タイラント先輩！」

「むー」

「どうしました?」

「タイちゃんって呼びなさい! それと堅苦しいから敬語禁止! でないとプラズマ砲撃つわよ!」

「わかったよ、タイちゃん」

「くふふ。よろしい。家に帰って、あたしの妹とマツクに行っていいわよ!」

「サンキュー、ママ!」

「ゆうーうるかむ!」

ちなみに、すぐノリのいい人だ。見た目は幼女だけど、実力は折り紙つき。舐めてかかると火傷するのは、この3ヶ月の訓練の中で嫌というほど実感してきた。

「いいこと、メイデン。あなたの到着が1秒遅れたせいで、救えたはずの命が救えなくなつたかもしれないよ。そこんところ、わかつてる？」

「うん……確かに失態だつたよ。ピンチの時に駆けつけてこそそのヒーローだもんね」

「そのとおり！ あたし達には人を救える力がある。だから、力を使って人助けするのは当然だし、その行いを誇つていいと思うわ」

「力を誇つていい……」

「どうだろう。ボクは自分の力を誇れるかな。」

行き過ぎた力は自分だけじゃなくて、周りを不幸にする。1週間前に起こした、あの事故みたいに誰を傷つけたら……。

「はあ……」

「なによ元氣ないわね。そんなんじゃないやダメよ！」

ボクがため息をつくつと、タイちゃんは小さな拳を握

り締めて――

「はいこれ」

握つた拳を開いて、一口サイズのチョコをボクの手の上に載せた。

「これは……？」

「アメーzing横町で買つてきたチョコよ。たたき売りしてて安かつたの」

タイちゃんはにこりと笑い、ぼんぼんとボクの肩を叩いた。

「お腹が減つてると悪いことばかり考えるものよ。これ食べて元氣出しなさい。ヒーローたるもの、常に笑顔でいなきゃダメよ」

「ありがと。そうだよね、人に勇氣を与えるヒーローがいつまでもクヨクヨしてちゃダメだよ」

「そーいうことよ。笑う門には福来たりゆよ」

「ふつ。また噛んでる」

思わず吹き出すと、タイちゃんもニコニコと笑った。叱った後に甘い物。飴と鞭といったところかな？

「お説教終わったクマー？」

会話が終わったタイミングで、間延びした声と共に、クマ耳をつけたロングヘアの女の子がタイちゃんの頭に顎を載せてきた。

「わぶっ!? ちよつと、まぐまぐ! あたしの頭に顔を載せないでって、いつも言ってるでしょ!」

「しよがないクマ。ちよつと私の顎の位置に、タイちゃんの頭があつて載せやすいんだクマー」

まぐまぐことトシマ・ヒーロー『磁界熊 マグマネツト』さんは、タイちゃんを背後から抱き締めながら、ラブを伝えていた。

このクマの付け耳に、茶色いバトラー服とカボチャ

パンツという変わった衣装の少女も、タイちゃんと同じくTHPの初期メンバーだ。磁力を操る能力を持っている、趣味は――

「タイちゃん、私にもチヨコちょうだいクマ♪」

「あんたいつも、UFOキャッチャーで大きなお菓子ゲットしてるでしょ。むしろ、よこしなさい。一度でいいから巨大なチオルチョコ食べてみたいわ」

「あれは中にチヨコじゃなくてフジツボが詰まってるから、素人にはお勧めできないクマ」

「そうなの!? キモッ! フジツボ、キモイっ!」

マグマネットさんの嘘知識を植え付けられ、タイちゃんが青ざめる。こんな話を聞いたら、もうチオルチョコを食べられないかもしれない――

「つて、さつき貰ったのチオルチョコだこれー!」

「何を騒いでるクマ? それより早く屋台を見てまわるクマ。射的するクマ、射的♪」

「でも、ボク達これからパトロールしないと」

「そうよ。これは遊びじゃないの。あそこに美味しそうなイカ焼きが売ってても、けっして食べたいしないうようにね、まぐまぐもぐもぐ」

「注意しながら食べてる!?! タイちゃん、言葉と行動が矛盾してるよ。ちゃんと仕事しなさい」

「わかってるわ。でも、お祭りって時々変なもの売ってるでしょ。それを見つけてゲットするのが、あたしの生きがい。だから、そわそわしちゃって」

「うんうん。気持ちよくわかるクマ。私もアニメイトウで、激レアカップリングの同人誌見つけたら大興奮だし! ねー、クリスチーヌ♪」

マグマネットさんが目をきらりと輝かせ、手に持ったクマのぬいぐるみに話しかける。

そうだった。マグマネットさんの趣味は腐った同人誌を集めることで、クマのぬいぐるみに話しかける癖

がある、いろいろと残念なヒーローだ。ちなみに、クマのぬいぐるみは趣味で持ち歩いているわけではない。あれこそがマグマネットさんの武器だ。

「さあ、お散歩しましょうね。クリスチーヌ」

マグマネットさんがクマのぬいぐるみを地面に置く。すると、ぬいぐるみは意思を持ったかのように自ら立ち上がり――

「ホモオ!」

二足歩行かと思つたら、四つん這いで迫ってきた!

「キモッ! Gみたいで怖い!」

「Gとは失礼だクマ! 彼の名前はクマの妖精『クリスチーヌ・熊吉』くんだクマ」

自称、クマの妖精はもふもふな手を振って、いまさら愛らしくアピール。それを見た周りの子供達が(騙

されて) 寄ってきた。ついでに、タイちゃんも目を輝かせた。

「あのクマ歩いてるわよ！ 買って買って〜！」

「タイちゃんが騙されちゃダメでしょ。あれ、中に鉄の棒を仕込んで磁力で操ってるんだよ」

「ほう、そのぬいぐるみ。磁力で動いておるのか」

ボクが突っ込みを入れてみると、そこに二つの人影が近づいてきた。

ひとつは糊の利いた黒いバトラー服に身を包んだ瘦躯の老紳士。もうひとつは、白いワンピースを着た幼女だった。透明感のあるゴールドのロングヘアに、フランス人形のような愛らしい顔をしている。

「キミは……」

「ふははは！ よくぞ訊いた！ 余はBO——」

「ルイさま。今日はオフです。仮面もお忘れですぞ」
「ぬわわっ！ しまったのだ！ 危うく正体をばら

して、お縄になるところだったのだっ！」

老紳士にやんわりを注意された女の子——ルイちゃん
は慌てた様子で咳払いをした。

「こほんっ、改めて自己紹介をしよう。余は天元ルイ。
そして、こっちの執事が」

「西園寺でございます。以後お見知りおきを」

「こ丁寧にどうも。ボクは本堂……じゃなかった、チ
ヨダ・ヒーロー『メイデン』だよ」

「噂には聞いておるぞ。3ヶ月前に入った新人ヒーロ
ーらしいな。頑張って一人前になるのだぞ」

「うん、ありがとう」

「くふふ。よい返事だ。これから応援してやろう」

ルイちゃんは満足げに頷くと、最後に眉を吊り上げ
て口元を歪めた。

「その力を悪しきことに使わなければ……な」
「どういう意味だい？」

「いずれわかる。そなたの品格が試される機会も、そう遠くないうちに訪れるであろう」

「品格？ 小さいのに難しい言葉を使うね」

「むむ！ そなた、余をおこちやまだと勘違いしておるな。これでも余は学園の2年生なのだぞ」

「え!?! じゃあ、うちの妹より年上!?!」

なんてことだ。絢乃もお胸は小さい方だけど、背は人並みだ。それに比べて、ルイちゃんは全身からロリ臭を放っている。これは犯罪？ いや、年齢的にも大人だからセーフだろうけど。

「どうしたのだ？ 何やら深刻な顔をしておるが」

「ああいや、何でもない」

藪を突いたら都条例に引つかかりそうだ。話題を変えよう。

「ところで、ルイちゃん達は花火を見に来たのかな？
本番は明日なんだけど」

「花火も楽しみだが、我らの目的は別にある。今日は国宝展を見に来たのだ」

「へえ、国宝展か」

墨田川近く、西國国技館の隣にある『江戸統京博物館』では現在『新本の国宝展』が開催されている。東西から集めた貴重なお宝が限定公開されるとあって、週末になると大勢の人で賑わう。明日は花火大会もあるから、さらなる混雑が予想される。

「ずいぶんと渋いものを見に行くんだね。西園寺さんの趣味かな」

「ええ。龍玉という国宝に興味がございます」

「龍玉……」

「どうかありませんか」

「いや、なんでも。会場までの道はわかるかな？」

「お気遣いありがとうございます。地図もありますので、ご心配には及びません」

「おっと、余計なお世話だったかな」

「よいよい。道案内はヒーローの基本だ。これからもそうやって、困ってる者を見たら助けるがよい」

「うん。そうだね。頑張るよ」

ルイちゃんに励まされ、少し胸が熱くなる。

「そうだ。こうやって、小さいことからコツコツと人助けをしていけばいいんだ。そうすれば、いつかきつと『みんな』を救えるヒーローになれるはず。」

「ルイさま、そろそろ博物館に向かいましょう」

「そうだな。と、その前に……」

西園寺さんに促されたルイちゃんは、懐から出したクマの超合金ファイギアで――

「そんな人形より、余の作った『クマキチンZ』の方が強いぞ！ くらえメカキック！ ガキーン！」

なんと、クマのぬいぐるみを蹴り飛ばした！

「ああ！ 私のクリスマスが！」

「ふははは！ どうだ、まいったか。そなたのクマだけ目立ってズルイのだ！」

熊吉を襲った理由なき暴力に、マグマネットさんが慌ててその身体を抱き締める。そして、隣にいたタイちゃんは瞳に炎を宿した。

「売られた喧嘩は買う主義よ！ いまこそ、あたし達の真の力を見せる時！」

「わかったクマ！ タイちゃん、愛と勇気をオラにわけてくろ！」

「磁力と風の合体技！ 超電磁スピ――」

「こら！ こんなことで力を使っちゃダメだろ！」

「あー！」
ボクは本気を出し始めたタイちゃんの背中をむんずと持ち上げ、脇に抱える。

「大人げないですぞ、ルイさま。レディーにあるまじき行為です」

「うるさいのだっ！ 余の科学力は世界一いいいい！
つてところを、急進派の連中に見せつけてやるのだ！」

一方、ルイちゃんも西園寺さんに捕まっていた。ルイちゃんは西園寺さんに抱えられたまま、手足をバタつかせて遠くへ去っていった。

「ふっ、正義は必ず勝つくマ」

マグマネットさんはクマのぬいぐるみと一緒に、両手を腰に当てて胸を張る。

「正義……か」

ありふれた言葉。だけど、その言葉が妙に胸の奥に引っかかった。

3

「遊んでたら時間がなくなつたわ。急ぐわよ」

「うん、誰のせいだろうね」

それからボクとタイちゃん、マグマネットさんと公園周辺のパトロールを行うことにした。他の班もそれぞれ別のポイントで巡邏を行っている。

ボク達はC班——『台等区墨田公園警備隊』に所属している。実にややこしいが、墨田公園の敷地は墨田川の両岸に分かれており、西側の台等区と東側の墨田区で管轄が違ふ。台等区川の責任者はタイちゃん、墨田区側はイダテンさんが指揮を執っている。花火大会も台等区と墨田区の両区で共同開催しており、毎年どちらを顔にするかで揉めるといふ。

「見て見て射的クマ。懐かしい。やってくクマー」

パトロール中、マグマネットさんが道沿いに建ち並ぶ屋台に近づいていった。花火の本番は明日だが、気の早い店主が今日から営業を始めてるようだ。

「ダメだよ、マグマネットさん。パトロールの途中なんだから」

「まったく、まぐまぐは子供ね。あ、あつちはなにかしら。見に行つていい?」

「はいはい、タイちゃんもダメだよ。迷子になるから、お姉さんと手をつなごうね」

「はい!」

ボクはタイちゃんの手を握りながら、マグマネットさんを追いかける。すると、屋台の前に座っていたおじさんが顔を上げて――

「しゅこー、しゅこー。いらっしやい、しゅこー」

訂正。おじさんじゃなくて、迷彩柄のフードを目深に被つた怪しい女の子が屋台に座っていた。しかも、口と鼻を覆う半面のガスマスクをつけて、衣装はダークブルーのレオタード。この子は――

「バレバレじゃない。おはよう」

「おはよう、タイちゃん……しゅこーしゅこー」

アダチ・ヒーロー『弾丸 バレット』はガスマスク越しに『しゅこー』と挨拶を返す。この子もヒーローの一人でボクの同期だ。それはいいんだけど。

「どうしてバレットが屋台に座つてるんだ? キミ達はA班……博物館の警備をしてるはずだろう?」

「訓練の一環っしゅ。屋台の店主になりきつて、危険人物がいなかチェックしてるしゅこー」

バレットはそう言うと、フードと同じ柄のジャケットの下からスナイパーライフルを取り出した。

「怪しい人を見たら、このM24で狙い撃つしゅ!」

「ちよっ!? 往來の真ん中で、そんな物騒なもの出しちゃダメだろ」

「大丈夫っしゅ。装填されてるのは麻酔弾。それに撃った弾は必ず当たるから問題ない……ターゲットに当たるとは限らないけど」

「あはは、さすがはバレバレ。『必中』の能力を持つているだけはあるわね」

「笑いごとじゃないからね。ターゲット以外にも当たつたら意味ないからね」

バレットの能力は、撃った弾が必ず的に当たる『必中』ただし、狙いを定めないと何に当たるかわからない。無駄弾は撃たないが、無駄死には出るといふ厄介な力だ。強力だけど、その分コントロールが難しい。『冗談しゅ。ま、いざとなつたらお上が賠償金を払つてくれるから問題ないっしゅ』

「うわあ。性質が悪い!？」

誰だこの子をヒーローにしたの。危険人物すぎる。いや、人を悪く言うのはよくないな。バレットだつて、理由があつてヒーローになつたはずだ。

「そういえば、バレットちゃんはどうしてヒーローになつたクマ?」

ナイスなタイミングで、マグマネットさんが訊ねてくれた。バレットはライフルを、うっとりとした表情で撫でながら。

「合法的に人を撃……正義のためっしゅ（キリッ）」

「こらー! いま、なんて言いかけた!? おまわりさん、こいつです!」

『「こらー」つて怒る人、初めて見たっしゅ……』

「はあ……まだパトロール始めたばかりなのに、すごく疲れたよ……」

「大丈夫? チョコあげるから元気出さない!」

「タイちゃん。私にも私にも!」

「だから、まぐまぐは自分のを食べてなさい」

「お腹が空いたなら、向こうの屋台に行くといいつしゅ。小料理屋がお店を出してるしゅこー」

「ほんど？ すごーい。行ってくるクマー」

「まぐまぐ！ だから遊びじゃないっていうのに。あ、ちなみに射的は1回いくら？」

「だから、タイちゃんも自重する！」

「ふえー」

ボクはタイちゃんを再び脇に抱え、バレットの屋台を後にする。ボク、ツッコミキャラじゃないんだけどな。少しは真面目にパトロールをさせてほしい。

「みんな、来てみるクマ！ 本当に小料理屋がお店を出してるクマ」

マグマネットさんの手招きに応じて近づくと、『新鮮・魚』と書かれたのぼりがかけられた屋台があった。

「煮物でも出してくれるのかな？」

鮎の塩焼きならよくあるけど、魚料理を出してくれる屋台なんて珍しい。期待に胸を躍らせて、屋台を覗くと――

「さあさあお立ち会い。ここに出したるは、まな板の上の鯉！ それを拙者が、包丁でシュパンと切れば、ぱぱっと完成。見事な鯉の活け作り！」

と、ドラゴンの形をした青いヘルメットをかぶった男の人が、がまの油売りのような口上を立てながら、まな板の上に横たわる鯉に包丁を向けていた。

この流れだとおわかりだろうけど、この人もヒーローの一人。シナガワ・ヒーロー『両断 シュパン』さんだ。

「シュパンがシュパンって……ギャグかしら？」

「っていうか、どうしてシュパンが屋台で鯉の活け作り作ってるクマ？」

「おや、タイちゃん殿にクマ殿。それに……」

「メイデンです。今年の4月から、チヨダ・ヒーローをしています」

「おお。春から来たニューフェイスでござったな。拙者、つい最近まで修行に出てたから、顔を覚えてなかったでござる。失敬失敬」

挨拶を交わすと、シュパンさんはヘルメットを掻いて苦笑を浮かべた。時代がかった喋り口調なのは、以前所属していた剣友会での名残らしい。

剣友会というのは、殺陣を演じる集団で、有名なところだと仮面のヒーロー・エンジンのスーツアクターを務めた『小野剣友会』だろう。ボクも小さい頃……いや、今でもDVDを見て、役者の動きを研究している。ヒーローとなったからには、格好良くありたい。そんなボクにとって、シュパンさんは理想のヒーローの一人だ。立ち振る舞いが凛々しく、武器も刀つてところに痺れる憧れる。

「修行つて、山ごもりして滝に打たれたりするんですか？ ボク、そういうの燃えます！」

「期待させてすまぬが、今回の修行場は『カッパ寿司』だったでござるよ」

「それつて回転寿司チェーン店の？」

「左様。拙者、そこで魚をさばいて剣の腕と心を磨いてきたでござる。結果、シヤリを握っただけでグラムを当てられるようになったでござる！」

「心眼を開眼したんだね！」

「いやいや。それ心眼違うクマ。あとシヤリの重さがわかるのと剣術は関係ないクマ」

「とにかく、修行の成果をご覧にいれよう！」

シュパンさんはそう言うと、手に持った包丁を振りかざし――

「キエエエイ！」

気合い一閃！ 包丁がまな板の上を泳いだかと思つた次の瞬間、鯉は一瞬にして三枚に下ろされ、白い身が均等の大きさに切り分けられた。

「すごい……！」

これが手にした刃物であらゆるモノを切断する、『両断』の能力だ。けれど、本当にすごいのは一瞬で鯉をさばいたその技量。いくら切れる刀を持つと、それを使いこなせなければ意味がない。

「腕を上げたわね。前は刀が臭くなるからって、ナマモノに触れるのすら嫌がってたのに」

「ふふふ。男子三日合わざれば刮目して見よ、でござる。修行の結果、拙者はナマモノを克服したでござる。ただし、『いきもの』には相変わらず歯が通らないのござるけどね。でも、それでよかつたと思つてござる」

シュパンさんは包丁を片手に、苦笑を浮かべる。

「拙者が目指す剣は、人を護る『正義の剣』。この力を

人殺しの道具には使いたくないでござる」

「さすがはシュパンさん！ そうですよ、ヒーローはそうでなくちゃ」

「あはは。よせやい。照れちゃうでござるよ」

「でもでもシュパン。よく見るとまな板ごと、シュパンつていつてるみたいクマよ」

「なん……だと……!？」

見れば確かに鯉だけではなく、その下のまな板も綺麗に切り刻まれていた。あやうく机まで真つ二つ。

「まだまだ修行が足りないみたいね。そんなんじゃ、先輩としてダメダメよ」

「うぬぬぬ。無念！ しかし、拙者はこの長い剣の道を歩き始めたばかり！ シュパンの次回作にご期待するでござる！」

シュパンさんは涙を流して包丁をその場に置くと、土手に向かって走り始めた。

「シュパンさん。お店はどうするんですか？」

走り去る背中に呼びかけてみたものの、シュパンさんは若さとは振り返らないことだと悟ったらしく、そのまま土手を上って行ってしまった。

「さてさて、回収っと」

店番のいなくなつた屋台の前で困っていると、ほっかむりをかぶつた女の子が包丁を背中のカゴにしまつていた。こんな白昼堂々と、しかもヒーローの目の前で盗みを働くとはいい度胸だ。

「って、待てよ。この顔には見覚えが——」

「こら、フューちゃん。人様のもの、ちよろまかしちやダメクマよー」

「あ、マグっさん。ちゃうちゃう、ギツたんやないわ。移動させようとしただけですわ」

マグマネットさんに声をかけられた女の子が、顔を上げて手を振る。彼女はイタバシ・ヒーロー『剣客小

町 フューリー』。またまたヒーローの登場だ。

「危険やからしもうとこ思ててん。刃物が外に置きっ放しになつてたら危ないやん？」

「それはそうだけど、フューちゃん。武器を集めるのが趣味だから、てつきり」

「シュパンはんの愛刀なら欲しいところやけど、さすがに近所のスーパーで買うてきたもんはコレクションに入れられせんわ」

フューリーは刀剣類を集めるのが趣味というか、生きがいだ。そうして集めた刀剣をサイコキネシスで操つて攻撃する能力を持っている。趣味と実益を兼ねてるわけだ。むしろ、そういう趣味があるから能力が開花したという見方もできる。

ボク達がつ能力は、先天性のものだ。だけど、それがどのタイミングで目覚めるかは個人差がある。素質はあるが、力に目覚めないまま一生を終えるケース

だつてあるだろう。ボクのように、手術によつて植え付けられた場合を除けば。

「ウチがシユパンはんの代わりに店番しとくさかい、メイデンはん達はパトロール続けててええで」

「ありがとう、じゃあ任せていいかな？」

「はいな」

「すいませくん。ちよつといいですか？」

「お、さつそくお客さんや。何か作りましょか？」

「料理はいいんで、包丁売つてくれますか？ さつきお

兄ちゃんが浴衣美人に目移りしてたんで」

「ちよい待ち！ ぶつそうなこと言いなさんな。ウチでよかつたら話を訊くで」

「ほんとですか？ 実ほ……」

屋台に陣取つたフュリーは、青髪の女の子のお客さんの愚痴を聞き始めた。小料理と一緒にお酒を出しそ
うな勢いだ。後は任せても大丈夫そうかな？

「じゃあ、あたし達は警部本部に向かいますよ。なんだかんで、また小腹も空いてきちゃったし」

「本部に行けば。お菓子食べ放題放題クマー！」

「はあ……ピクニックじゃないんだから……」

絢乃。お姉ちゃんは、こんな先輩ヒーロー達と一緒に頑張つてます。

性格に難がある人ばかりだけど、実力は折り紙付き。だからこそ、ヒーローに選ばれた。自分で言うのもアレだけど、23区ヒーローはそれぞれが一騎当千。一人をクローズアップして特集を組めば、テレビシリーズを1本録れるくらいの精鋭揃いだ。

そんなヒーロー達が一堂に揃い、大規模な警備任務に当たっているのには訳がある。

それは、1週間前。都庁に届けられた『ある予告状』が原因で――